

受賞作 牧角悦子氏『経国と文章—漢魏六朝文学論』（汲古書院、2018年）

受賞理由

本著作は、中国古典における「文」は、我々が一般的に言う「文学」とは異なる一つの大きな価値として存在したことを主張するものである。

中国古典における「文」とは、まずは政治性・社会性を有するものであり、儒教的価値の発頭を第一義とする。そこから派生して、文飾や抒情性・修辞など、より確実でより効果的な伝達を目的とする文学性が第二義的に要請された。したがって、その文学性は必ずしも二〇世紀的な「文学」と等値ではない。ただし、中国古典における「文」の世界にも、豊かな表現力をたたえた「文学性」や、表現當為そのものの意味を問う「文学意識」が認められる。そしてそれは、中国古典における「文」のなかに大きな文学意識の变革があり、「文」から「文学意識」が立ち上がる六朝時代であったとするのである。

第一部は、漢代における「文」概念の確立をめぐって、漢初の賈誼、後漢の班固を対象に検討を行う。第一章は、賈誼「弔屈原賦」「鵬鳥賦」が『楚辞』あるいは騷体賦から漢賦へと架橋する役割を果たす、漢賦の原基であったことを検証する。賈誼の賦は、現世における矛盾や葛藤を表現という仮構の世界に昇華し、賦という「文」の中で自由に遊ぶ。その知的な表現作業から生まれた想像空間の創造性こそ、漢賦の文学性を切り開くものであったという。第二章は、班固「答賓戲」の著述意識が、それ以前の「文」に対する認識をひとたび収斂するものであり、それが『漢書』叙伝に収録されて、それ以降の文論の原点となったことを論じる。「答賓戲」は、班固が「著述」を業とする誇りを文学性豊かに高らかに表出したものである。こうした班固の著述意識が、六朝文論の基底として後世に通底していくこととする。

第二部は、六朝文論の起点である建安をめぐり、三曹（曹操・曹丕・曹植）を主対象に、文学性や文学意識を探究する。

第三章は、漢代までの文学を「呪術」から「抒情」への展開として把握したうえで、文学史における建安年間の位置づけを曹操の楽府と曹植の五言詩から検討する。曹操の楽府は、おのれの内から沸きあがる感慨を直裁に大胆に歌うもので、詩歌の世界にそれまでにない新しい可能性を開示した。また、曹植の「贈白馬王彪」は、六朝に洗練度を増す五言詩に豊かな抒情性を切り拓いたもので、『詩経』『楚辞』そして「古詩十九首」を踏まえながら、そこにとどまらない感情の表白に本領を持つ。第四章は、曹操の楽府を民歌・俗謡ではなく、王朝の楽曲の整備という観点から検討し、その新規性を「新声」「新詩」という評価語から解明する。曹操の楽府は、新しい王朝運営のための新しい楽曲という点で「新声」であり、旧来的楽府詩とは異なる要素を有する「新詩」であったことを論証する。第五章は、曹丕『典論』「論文」、曹植「与楊徳祖書」の行論を対比的に検証し、曹植「洛神賦」の「抒情性」に言及して、「文学意識」と「文学性」の成熟を論じる。曹植は、儒教的価値を自覚する一方で、「経国」と切り離された「文章」を制作し、「洛神賦」の抒情性と物語展開のなかに新しい「文学性」を発見することで、表現世界の自律的な価値を表現したという。第六章は、漢代楽府の流れを受け継ぎながら、新しい抒情性を獲得することで、次の時代の五言詩の確立の端緒を開く曹植の楽府の文学性を論ずる。曹植の楽府は、フィクションの中に自由な空想を繰り広げ、現実の苦悩を表現の世界に昇華させ、それを解放させようとすることを特徴とするという。

第三部は、『文選』序文に見える「文学意識」について、序文の全体像、「賦」の重視とその背景、そして「文」概念の独自性を取りあげる。

第七章は、『文選』序文の全体像を概観し、梁代の「文学意識」の特色を探究する。『文選』序文は、「文学」が、創作芸術としての自立性を獲得していく過程の新しい文学意識の発露である一方で、その行論は保守性が強く、あくまでも儒教的「文」の伝統に則るものであるとする。第八章は、『文選』序文における「賦」の説明に「詩の六義」が引用されることに着目し、「賦」「詩」という表現形態を探究する。そして、『文選』が収録する漢代中葉以降の「詩」に、諷諫とはつながらない「抒情性」を見出す。第九章は、『文選』編纂における賦の分類、編纂時に除外された「文」を検討し、「文」概念の独自性を探究する。『文選』の分類は、文体よりも文の持つ用・機能を重視し、除外された雄弁は、演劇的要素を含みながら躍動する言説群である。こうした機能と形式の区別、物語的要素を含む言説への意識に、『文選』と序文における独特な「文」への認識が看取できるという。

第四部は、謝靈運詩を取り上げる。第十章では、謝靈運詩の変遷を追跡し、その詩風を明らかにする。謝靈運詩の特色は、「理」が崩れ去って後の詩人の中で、湧き起こる情と鋭敏な感性とが、美の一点に集中し燃焼した、最後の閃爍である「刹那」と、一貫して聖賢や古人への思慕が述べられる「伝統」の二語で総括できるという。第十一章では、始寧退隱期の謝靈運詩に頻出する「理」について、竺道生による頓悟説を擁護する思想論文「弁宗論」を援用しながら論じる。そして、始寧期の謝靈運詩は「弁宗論」を思想的背景にもち、「理の体得を通じて一挙に悟りを実現するという境地」を描いているとする。

付論である第十二章は、日本における『文選』研究の歴史と現状を紹介するものであり、『文選』の日本への伝来と受容、そして近代以降の学術研究史が網羅的に記述されている。第十三章は渡邊義浩『「古典中国」における文学と儒教』への書評である。本書は、かつて渡邊義浩『「古典中国」における文学と儒教』が、歴史学的視点から提示した文学と儒教との関係を、本書は儒教的「文」概念を前提としながら、そこに「文学性」や「文学意識」の成熟を見出すという文学的視点により再構成するものであり、その意味において両書は問題意識を共有する。

中国古典における「文」概念は、当時の正統思想である儒教なくしては成り立たないものであった。しかし、それがひとたび言語表現としてあらわれたならば、儒教のもとに第二義的であっても、そこにはすぐれた表現力をそなえた「文学性」があり、また表現それ自体へと向かう「文学意識」がある。本書は、漢魏六朝時代を対象として、中国古典における「文学性」や「文学意識」の成熟過程を、ひとつひとつの個別的事例の検討により明らかにしたものであり、班固の著述意識を六朝文論の原点に据えたこと、曹操の樂府を礼樂の顕示と結びつけて再検討したこと、『文選』序文における「賦」の位置づけを明示したことなど、特筆すべき多くの成果をあげた。

以上の内容を持つ牧角悦子氏『経国と文章—漢魏六朝文学論』は、第二回 狩野直禎先生記念 三国志学会賞の授与に値するものである。